



27 石浦大橋

種 別：有形文化財 建造物（平成 14 年 4 月 5 日 県指定）

所 在 地：久留米市大橋町合楽 1082 おおはし歴史公園

アクセス：西鉄バス「常持」下車徒歩 10 分

久留米から豊後国に向かう豊後街道は、耳納山地沿いに走る山辺道と筑後川沿いを走り田主丸町を通過する中道がありました。この石橋は、豊後中道の巨勢川を挟んだ指出村と石浦村の間に架けられたものです。

建造は元禄 11 年（1698）で、県内では大牟田市の早鐘眼鏡橋（1674 年）、筑後市の熊野神社の眼鏡橋（1697 年）に次いで古く、桁橋では最も古い橋です。桁行 5 間、梁行 2 間の石造柱梁式の石橋で、石材は江戸時代前期から用いられているうきは市の山北石です。柱脚は 2 本で構成、中央部が高く両端が低くなった橋です。

この橋は、明和 2 年（1765）に最初の補修が行われた後、明治・大正・昭和と修理を重ね使われてきましたが、道路交通の不便さや水害の恐れがあるということで昭和 50 年に解体され、部材は善導寺に保管されていました。

地元からの復元の要望もあり、「おおはし歴史公園」整備事業のメインとして、建造されてから 300 年後の平成 10 年 3 月に復元されました。



はこぎきはちまんぐう おお
28 宮崎八幡宮の大イチョウ

種 別：天然記念物（昭和 61 年 8 月 28 日 県指定）

所 在 地：久留米市大橋町蜷川 1012

アクセス：西鉄バス「常持」下車徒歩 20 分

イチョウは、中国が原産の雌雄異種の植物です。八幡宮のイチョウは、実のつかない雄株ですが、樹勢は盛んで、樹形もよく古木の風格を備えています。樹高は約 25m、胸高の幹周りは約 5.5m あります。

昔、大戦乱に敗れた一人の高貴な女官が師走（12 月）のみそかに、八幡宮の東北の隅にあった平野社社殿に住み着き、雨露をしのぎ正月を迎えました。それを見た村びとの一人が食べ物もないだろうと哀れんで、元旦早々の宮参りの時、鏡もちをひと重ね恵んであげました。他の村人も心は同じで、皆こっそりと食べ物を持ち寄ったそうです。この女性の死後、埋葬し、墓標のかわりに植えたのが、このイチョウといわれています。

平野社は、宮崎八幡宮（永正 11 年（1514）建立）に合祀されましたが、『安徳天皇^{せんこう き}潜幸記』、『常持^{つねもち}庄^{しやうのまえ}前社記』、『水天宮記』等から推察すると、大戦乱は「寿永^{じゆえい}の乱」（1182）の頃と思われる。とすると、大イチョウの樹齡は約 800 年と推定されます。



29-1 須佐能袁神社本殿、すさのおじんじゃほんでん 拝殿及びはいでんおよび 楼門ろうもん



種 別：有形文化財 建造物（昭和 32 年 4 月 23 日 県指定）

所在地：久留米市草野町草野 443-2

アクセス：西鉄バス「草野上町」下車徒歩 2 分

J R 筑後草野駅下車徒歩 5 分

須佐能袁神社は耳納山地の北麓に建つ神社で、平家討伐に軍功のあった竹井城の草野永平が、けんきゅう建久 8 年（1197）に勧請したといわれています。草野家は、てんしょう天正 16 年（1588）、豊臣秀吉の九州平定の際に滅亡しましたが、以後この町の氏神として祀り崇めてきました。社名は、祭神素戔鳴尊に由来しますが、旧名の祇園社と呼ばれることも多くあります。

北から石橋、楼門及び回廊、水屋、ひさし拝殿、庇ノ下、神殿等が並んでいます。今の社殿は、明治 14 年（1881）に起工し、同 19 年に上棟したもので、大工総棟梁は久留米の岡崎吉兵衛があたり、各建築はそれぞれの棟梁があたりました。また各所に見られる彫刻は、榎津の村石繁造の作になります。建築様式は、神殿は神仏習合様式の権現造、楼門は和様唐様で一部天竺様の建築です。重厚で壮大な建物とそれを飾る彫刻が実に見事です。



29-2 須佐能袁神社の神幸行事

種 別：無形民俗文化財（昭和 59 年 6 月 29 日 市指定）

所 在 地：久留米市草野町草野 443-2

アクセス：西鉄バス「草野上町」下車徒歩 2 分

ＪＲ筑後草野駅下車徒歩 5 分

神が山から村里に降りて来て人々の願いを聞き、再び神社に帰られるという神事を「神幸行事」と総称しますが、土地によっては御幸・御出・御旅^{たび}などとも呼ばれます。

地元に残る風流^{ふうりゅう}縁起^{ゆき}によると文政 11 年 (1828) 神幸祭が起こり、神幸行事が演じられていたようです。この神社は、以前は勝光山祇園寺と呼ばれていて、祇園塚と呼ばれた仮宮との間の御神幸でした。明治 2 年 (1869) の神仏分離の際、今の社名に改称され、明治 19 年社殿再興の後、風流に大名行列と獅子舞が組み入れられ、現在の形になりました。

また、祭りの開催時期も時代とともに変わり、昭和 55 年に再開されたときに、現在のような夏休みに入った最初の土、日曜日に隔年開催されるようになりました。





竹井城の幅 草野歴史資料館提供

30-1 紙本 著色 若宮八幡宮縁起

種別：有形文化財 絵画（昭和49年11月1日市指定）

所在地：久留米市諏訪野町1830-6 久留米文化財収蔵館

アクセス：西鉄久留米駅下車徒歩10分

西鉄バス「税務署前」下車徒歩3分

草野町の若宮八幡宮に伝来してきたもので、竹井城を中心とした幅と発心城を中心とした幅の2幅からなります。

この地方を治めていた草野氏は、天正5年(1577)に竹井城から発心城てんしやうに居城を移し、天正10年頃までには屋敷や町屋も城下に移っていったようです。



発心城の幅 草野歴史資料館提供

しかし、天正 16 年、豊臣秀吉の家臣^{はちすか}蜂須賀家政によって草野家清が殺され、草野永平以来 420 年の長い間この地方を治めていた草野氏は滅びました。

これらの縁起には、天正年間の草野氏居城の姿や若宮八幡宮、祇園社、熊野権現などのお祭りの様子などが描かれていますが、人物の服装や風俗から判断すると、江戸時代中期以降の作品と思われます。画風は狩野派^{かのう}の流れをくむ画家が、大和絵画に仕上げたものようです。竹井城の幅は後になって修復した個所が多く、2 幅は別の画家の手によるもののように見えますが、多少の時期を違えて同じ画家によって描かれた作品のようです。

複製を久留米市立草野歴史資料館で見ることができます。



30-2 若宮八幡宮の神幸行事

種 別：無形民俗文化財（昭和 59 年 6 月 29 日 市指定）

所在地：久留米市草野町吉木 2611

アクセス：西鉄バス「吉木」下車徒歩 10 分

これも須佐能袁神社の神幸行事と同じように、草野町で今も行われている行事で、地元では「放生会」と呼ばれています。

戦国期の草野氏支配期は、領主自ら神輿に随伴するなど、盛大に行われていました。しかし、天正 16 年 (1588) に草野氏が滅亡すると、神幸祭を中断しましたが、その後時代は不明ですが復興され、戦時中の中断を挟み、現在に至ります。行事の時期は、時代により変化がみられますが、今は 1 年おきに 9 月の 2 日間で行われています。

この行事も、風流・獅子舞・大名行列からなります。まず初日に、八幡宮本殿で神事祭や獅子舞・風流の奉納などがあり、夕方お仮屋に神輿を安置します。二日目に、八幡宮に向かって出発し、前日と同じように行事を行います。そして八幡宮に到達し、拝殿前にて二・二・三拍の手打ち式にて終了します。





もくぞう あ み だ によらいりゅうぞう
31 木造阿弥陀如来立像

種 別：重要文化財 彫刻（大正3年4月17日国指定）

所 在 地：久留米市草野町草野 258 専念寺

アクセス：西鉄バス「草野上町」下車徒歩2分

JR筑後草野駅下車徒歩5分

草野町にある西向山専念寺は、浄土宗の第二祖で、善導寺開山の聖光上人の弟子持願上人が、元久元年（1204）開基した寺といわれています。本寺は「九州の日光」に称されるように、本堂や内陣は金泥の柱、格天井には龍、四方には極楽浄土の壁画が描かれています。その中で、中央の須弥壇に安置されているのが、本尊の阿弥陀如来立像です。

この像は、一木造りで表面は漆塗り、材質はタブと言われています。一部、快慶の作である唐招提寺の阿弥陀如来立像と酷似しているところが見られますが、全体的な様式からすれば、鎌倉時代のものと考えられます。

寺伝には、恵信僧都の作と伝わり、田主丸町善院にあった古い寺院の本尊が移されたといわれています。また、観音、勢至の両脇侍は、江戸時代以降のものと考えられます。



32 ^{か げ け じゅう た く}鹿毛家住宅

種 別：有形文化財 建造物（平成元年 8 月 26 日 県指定）

所 在 地：久留米市草野町草野 405-1

アクセス：西鉄バス「草野局前」下車徒歩 1 分

草野町は江戸時代、久留米から豊後日田への街道沿いの宿駅、在郷町として栄えた所です。街道沿いには、造り酒屋・醤油屋・質屋など、30 種以上の職種の民家が建ち並んでいました。その中で鹿毛家は、江戸時代から醤油醸造、^{ろうそく}蝋燭製造、質屋等を幅広く営む商家で、盛時には屋敷内に数十棟の蔵が並んでいました。

現在残っているのは、表門・主屋・棟続きの蔵（番屋、醤油庫、石炭庫、漬物納屋、室庫として使われていました）・井戸小屋などで、それらの建築年代は確かな記録は残っていませんが、^{く で ん}外観や家の口伝から 18 世紀末前後と推定されます。

鹿毛家住宅は、宿場町として栄えた草野の町並みの中心にあり、現在残っている大型町屋としては最も古く、また、規模も大きく、福岡県の民家建造物の歴史を見る上で、重要な建造物の一つです。



33 草野歴史資料館 (旧草野銀行本店)

種 別：国登録文化財(平成11年3月12日 門は平成11年7月19日登録)

所 在 地：久留米市草野町草野 411-1

アクセス：西鉄バス「草野局前」下車徒歩 2 分

建物は、明治 43 年 (1910)7 月、株式会社草野銀行本店として建てられ、戦後は福岡銀行草野支店として利用されていました。木造 2 階建ての建物で、大正デモクラシーの中、洋風建築が流行しましたが、その先駆けとして建てられました。和洋折衷の均整のとれた建物で、唐草文をあしらった鉄柵、垣根や門扉などとともに、旧三井郡の中心地として栄えていた草野町が先進文化を吸収していたことを示しています。

屋根及び外壁の修復、内部を展示室に改装し、昭和 59 年 (1984)2 月に草野歴史資料館として開館しました。当地方の豪族草野氏ゆかりの絵縁起や古文書等が展示されています。

開館時間：午前 10 時～午後 5 時

休館日：毎週月曜日 (祝日の場合はその翌日)、祝日の翌日 (日曜日を除く)、年末年始 (12 月 28 日～1 月 4 日)

入館料：小・中学生 50 円、高校生以上 100 円

団体 (20 名以上) 小・中学生 30 円、高校生以上 80 円

毎週土曜日は高校生以下無料



34 やまべのみちぶん か かん きゅうなか の びょういんしんりょうとう そう こ 山辺道文化館 (旧中野病院診療棟及び倉庫)

種 別：国登録文化財(平成11年3月12日)

所 在 地：久留米市草野町草野 487-1

アクセス：西鉄バス「草野局前」下車徒歩2分

久留米市の東部、耳納北麓に広がる草野の伝統的町並みの中にある建物で、大正3年(1914)に中野病院として建設されました。当初は久留米市花畑で建設中であったものを草野町に移築し、現在地で完成したといわれています。九州地区では珍しい大規模な木造洋風2階建てで、近代的な洋風の病院建築が地方に定着していった時代の貴重な資料です。また、デザイン的にも優雅で堂々とした印象を与える優れた建物です。

平成10年10月に「山辺道文化館」としてオープンし、地元の祭りや町並みを紹介する部屋を設け、耳納北麓の観光拠点として無料(会議室等使用は有料)で利用する事ができます。

開館時間：午前10時～午後5時

休館日：毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、祝日の翌日(日曜日を除く)、
年末年始(12月28日～1月4日)



35 寿本寺山門 じゅほんじさんもん

種 別：有形文化財 建造物（平成 5 年 6 月 22 日 市指定）

所 在 地：久留米市草野町草野 397 - 1

アクセス：西鉄バス「草野局前」下車すぐ

寿本寺は、豊後街道沿いの宿場であった草野町にある浄土真宗の寺院です。寺の歴史は古く、天文元年（1532）に草野氏により建てられたと伝えられています。

この山門は、木造・本瓦葺で切妻屋根を持ち、「3間1戸」の門形式で薬医門の部類に入ります。これは、江戸時代後期の建築と考えられ、その柱や屋根が比較的大きいなど、重厚な造りをしており、武家門らしい外見をしています。屋根の鬼瓦に有馬家家紋の一つである「釘抜紋くぎぬきもん」が見られること、久留米城本丸の「水ノ手御門」であったことが伝えられていることから、久留米城の廃城後、明治 6 年（1873）以降に、城門が寺院の山門に移築・転用されたものと判断できます。

これは、旧久留米城の数少ない建築遺構として極めて貴重なものです。



36 発心城跡 ほっしんじょうあと

種別：史跡（昭和48年4月19日県指定）

所在地：久留米市草野町草野、田主丸町、八女市

アクセス：西鉄久留米付近から車で耳納スカイラインを30分
草野町から南へ約3.5km

発心城は、草野家清（鎮永）が代々の居城である吉木の竹井城が防備上不安であるため、戦国末、てんしやう天正5年（1577）に発心山（標高697.5m）に築いた山城です。東西約350m、南北約300mに及ぶ大規模な山城で、本丸、二ノ丸、見張台、堀切、土塁などが築かれていました。

てんしやう天正16年（1588）、豊臣秀吉の家臣蜂須賀家政によって、家清が南関で誘殺され、草野家が滅亡すると、この城も廃城となりました。本丸のほか見張台、堀切と思われる遺構などがよく残り、戦国期の筑後地方の山城の類例として重要なものです。



37 ^{ながいわやま}長岩山のサザンカ ^{じせいち}自生地

種 別：天然記念物（昭和 60 年 5 月 28 日 県指定）

所 在 地：久留米市草野町吉木

アクセス：草野町から南へ約 2.5km

サザンカ（山茶花）は、ツバキ科の植物で、わが国では九州、琉球諸島、四国や中国地方の温暖な山地に自生し、11 月頃に平たく開いた直径 5～8cm の白い五弁花をつけます。

椿と良く似ていますが、サザンカは花びらがぼらぼらに散るのに対し、椿は花ごと落ちます。また、子房に白い毛が密生し、葉の主脈や若枝に細かい毛が出るのもサザンカの特徴です。

長岩山には、2 ヘクタールに平均樹高 4m、幹の直径が 7、8cm のサザンカが数千本群生し、自生地としては佐賀県東背振村の「千石山サザンカ自生北限地帯」に次ぐ規模を誇っています。

38 前畑古墳

種 別：史跡（昭和 38 年 1 月 16 日 県指定）

所 在 地：久留米市草野町草野 504

アクセス：西鉄バス「草野局前」下車徒歩 5 分

以前は宮崎氏邸内古墳と呼ばれていた前畑古墳は、下馬場古墳より少し後の 6 世紀末頃から 7 世紀前半に造られたと考えられています。墳丘は削られて四角形になってしまいましたが、残った封土の形状と付近の諸墳の例から推測して径 20m、高さ 4.5m の円墳であったと考えられます。

装飾は赤と青の彩色で、石室内の広い範囲に描かれています。三角文もあつたらしいのですが、今は円文と同心円文だけしかはっきりとは確認できません。

副葬品は、耳環、鉄鍬、刀子、挂甲小札や須恵器などが出土しています。



◎装飾古墳について 1 ー壁画が描かれた古墳 ー

古墳は、5 世紀の半ば過ぎになると横穴式石室と呼ばれる石の部屋を造り、その中に地域の有力者やその家族を葬るのが一般的になってきます。横穴式石室は通常、死者を安置する「玄室」、死者を弔う祭りに使われた須恵器や供物などが置かれた「前室」、石室の入口の部分で玄室への通路に当る「羨道」に分かれます。こうした横穴式石室（又は横穴古墳の内部など）に彫刻・線刻・彩色によって、何らかの図形が描かれたものが装飾古墳です。

装飾古墳のほとんどが北部九州に集中し、中でも筑後川流域と熊本県北部の菊池川流域は、これらが特に密集しています。通常、壁画は前方後円墳や大型円墳の横穴式石室に描かれていることが多く、どの古墳にも壁画が見られる訳ではありません。

しかし、耳納山麓では比較的小型の古墳にも壁画が描かれ、しかもそれらが密集しているので、非常に特殊な地域だといえるでしょう。

39 下馬場古墳 しもばばこふん

種 別：史跡（昭和19年11月7日国指定）

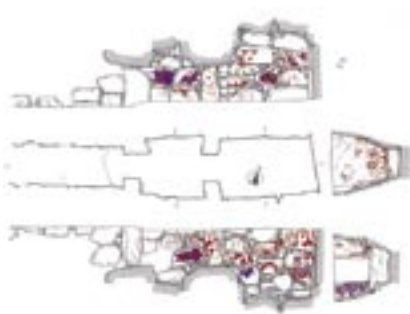
所在地：久留米市草野町吉木 2263 ほか

アクセス：西鉄バス「吉木」下車徒歩5分

下馬場古墳は、6世紀後半に築造されたと考えられ、前畑古墳や今は存在しない薬師下北・南古墳などとともに、よしきこふんぐん吉木古墳群と呼ばれています。

現在は方墳のようにも見えますが、径約30m、高さ約5mの円墳で、本来は現状よりひとまわり大きな墳丘でした。内部には前室ぜんしつ両側壁から玄室げんしつ奥壁おくへきまで、ほぼ壁面全体に壁画が描かれています。現在では湿度等の条件によっては観察が難しくなっています。奥壁には赤色の同心円が数個、玄室左右両壁に連続れんぞく三角文さんかくもん、また玄室右壁中央部には船と思われる文様を見ることができます。使用された顔料（絵の具）は赤色と青色が確認されています。

副葬品については不明ですが、墳丘の裾や外域から、えんとうはにわ円筒埴輪や女人埴輪が発見されたと伝えられています。



◎装飾古墳について2 - 壁画に描かれたもの -

壁画に表現された図形はさまざまで、同心円文・三角文・蕨手文などの「抽象的なもの」や、人物・船・盾・鞍（矢筒）といった「具体的なもの」が描かれています。

これらの図形は、死者を葬った玄室の部分に最も集中していることから、壁画が死者の魂を鎮めたり、死後の世界に送り、永遠の安息を願う意味を持つものであったと想像できます。

40 善導寺の文化財

40-1 善導寺本堂ほか7棟

(本堂・大門・大庫裏・釜屋・広間・書院・役寮及び対面所・中蔵)

種 別：重要文化財 建造物 (昭和 63 年 12 月 19 日 国指定)

平成 6 年 12 月 27 日 追加指定)

所在地：久留米市善導寺町飯田 550

アクセス：西鉄バス「善導寺」下車徒歩 5 分

善導寺は承元 2 年 (1208)、筑後国在国司、押領使であった草野氏の援助を受けて聖光上人が開創した浄土宗の古刹です。南北朝時代以降、度々兵火にあい衰亡しましたが、慶長 6 年 (1601) 筑後国主となった田中家によって再興され、江戸時代は九州の浄土宗の本山として栄えました。

広大な境内地のほぼ中央に南面して本堂 (天明 6 年：1786) が建ち、南方に釈迦堂・観音堂などの仏堂、東方には大門 (慶安 4 年：1651)、三門が配され、長い参道に沿って子院が並び建っています。

本堂の東には僧侶の居住や接客のための建築群があります。大庫裏・広間・釜屋・書院・中蔵などです。これらの建物は延享 5 年 (1748) の火災後に再建されたものです。大庫裏・釜屋は火災直後に再建、広間・書院・役寮及び対面所は寛延 4 年 (1751) に棟上し、宝暦 2 年 (1752) に概ね完成しています。内部の造作は引き続き行われ、宝暦 13 年頃に落成したようです。

善導寺には江戸中期に再建された建物が、旧態をよく残しており、近世寺院の宗教施設を具体的に伝えるものとして価値が高いものです。

40-2 木造善導大師坐像

種 別：重要文化財 彫刻 (大正元年 9 月 3 日 国指定)

善導大師は中国唐時代の高僧で、浄土宗の開祖です。この像は三祖堂の中央に安置されています。材は松材で、頭部前面を一材で彫り、それに後頭部と背中をはぎつけ、両肩、両袖、両手を取付けています。鎌倉時代の製作で総高 92.5 c m です。



善導寺本堂



善導寺参道



木造善導大師坐像

40-3 木造大紹正宗国師坐像

種別：重要文化財 彫刻（大正元年9月3日国指定）

大紹正宗国師とは浄土宗鎮西派の祖師で、善導寺の開山である聖光上人しょうこうしやうにんのことで、三祖堂さんそどうの向かって左の厨子に安置されています。松材の一本造りですが、頭部は別に彫り、体部にはめ込んでいます。こめかみに浮かびあがる二本の血管の鮮やかさなど、ありし日の姿を思いおこさせる写実的肖像彫刻です。文龜4年(1504)の修理銘が胎内背部などに残っています。

40-4 木造釈迦如来坐像

種別：有形文化財 彫刻（平成5年6月22日市指定）

本像は善導寺釈迦堂の本尊です。像内や膝前部分の内側に多くの墨書銘ぼくしよめいがあり、それから大仏師法橋湛誉と法橋湛真兩名によって正和3年(1314)に製作されたことがわかっています。さらに、別な墨書から、この仏像は元は三瀨郡酒見浄土寺にあったもので、後に善導寺に移ったものと考えられています。像高175.3cm。

40-5 木造宝冠阿弥陀如来坐像

種別：有形文化財 彫刻（平成5年6月22日市指定）

本像は書院に安置されています。像の裳先部に、南北朝時代の貞和5年(1349)の陰刻銘があります。伝来は当寺の末寺であった大川市榎津正覚院の本尊であったのが、元和年中当山24世大通上人へキリシタン弾圧の霊告げんながあり、その成就後、同院から当山へ納められたといえます。

40-6 木造阿弥陀如来坐像

種別：有形文化財 彫刻（平成5年6月22日市指定）

善導寺本堂に安置されている阿弥陀三尊像の中尊です。現在像底に板を張っているため、内部構造などについては不明です。像容・形式から鎌倉時代中期の製作と推定されています。



木造大紹正宗国師坐像



木造釈迦如来坐像



木造宝冠阿弥陀如来坐像



木造阿弥陀如来坐像

40-7 木造四天王立像 (多聞天像、広目天像、増長天像、持国天像)

種別：有形文化財 彫刻 (平成5年6月22日市指定)

本像は、四天護持の天部像として釈迦堂に置かれています。4 軀のうち多聞天 (毘沙門天) 立像は、胎内に保安元年 (1120) の墨書銘があることから、平安時代の作品だということがわかります。他の 3 軀は、様式からみて江戸時代の製作と考えられています。



多聞天像 (毘沙門天像)



広目天像



増長天像



持国天像

しほんちゃくしよくほんちようそしでんえことば
40-8 紙本 著色本朝祖師伝絵詞

種別：有形文化財 絵画（昭和34年3月31日県指定）

浄土宗の開祖、法然上人ほうねんしょうにんの一代の行状を4巻本に納めた伝記絵巻です。

奥書によれば嘉禎3年（1237）に沙門耽空かていが願主、筑前の絵師源光忠が描いた原本を、永仁2年（1294）に沙門寛恵えいじんが書写、さらにそれを転写したものです。画卷は段落式、連続式の手法を併用し、画中にも詞を書き込む自由な形式などから、室町時代の作品と推定されます。



第4巻部分（往生及び来迎）

あさ きぬちゃくしよくじぞうじゅうおうず
40-9 麻・絹著色地蔵十王図

種別：有形文化財 絵画（平成5年6月22日市指定）

画面中央に、右手に錫杖、左に宝珠を持つ地蔵が台座に結跏趺座し、地蔵のやや前方の左には僧道明、右には無独鬼王が立っています。また地蔵の左右には十王を5体ずつ配し、十王の後ろには六菩薩像や諸眷属を配した図像から、地蔵十王図と呼ばれています。画面中央下部の横長墨書銘文が20行あり、施主や画工の名が記されています。

朝鮮李朝の隆慶2年（1568）に製作されたものです。

ほんしょう
40-10 梵鐘

種別：有形文化財 工芸品（昭和33年11月13日県指定）

この梵鐘かんふんは寛文元年（1661）、当寺30世弁忍宗無の時、有志の人々による唐金の喜捨（寄付）で鑄造されたものです。総高188cm、口径123cmの大きさです。



麻・絹著色地藏十王図



梵 鐘

40-11 こんし きんでいかん ふ げんきょう 紺紙金泥観普賢経

種 別：重要文化財 書跡（明治44年4月17日国指定）

観普賢経は、仏の入滅の3か月前に説かれた經典です。本経は紺紙に10行幅の銀界を引き、金泥で経文を書写しています。奥書から承安2年(1172)に作成されたことがわかります。寸法は縦26.2cm、長さ728cmの卷子本です。



紺紙金泥観普賢経

40-12 善導寺の大樟ぜんどうじ おおくす

種 別：天然記念物（昭和 33 年 10 月 29 日 県指定）

山門を進むと右手に樟の巨木の枝葉が天を覆うばかりに茂っています。2 本の木は大きな空洞がありますが、樹勢は旺盛です。

この樟は善導寺の開山である聖光上人が植樹されたと伝えられ、樹齢 800 年という老樹大木です。長いお寺の歴史を見つめ続けてきたものです。



40-13 善導寺の菩提樹ぜんどうじ ぼだいじゅ

種 別：天然記念物（昭和 39 年 5 月 7 日 県指定）

境内には 4 株がありますが、勅使門前、鐘楼の南の 2 本が指定を受けています。菩提樹はお釈迦様がこの木の下で悟りを得たと伝わる木であり、寺院によく植えられています。中国原産のシナノキ科で落葉喬木です。果実から数珠を作るといわれています。



勅使門前



鐘楼南側

40-14 善導寺 經藏

種 別：有形文化財 建造物（平成 17 年 2 月 23 日県指定）

經藏は、本堂や三祖堂に向かう参道沿いにあります。建物の構造は正面三間、奥行三間、屋根宝形造、棧瓦葺で、内部には八角輪藏を安置する覆堂です。内部の床は切石敷、中央より少し奥に平面八角形の經典を納める輪藏（廻転式八角輪藏）がおかれています。

寛文 10 年（1670）の善導寺から寺社奉行への報告では、經藏にふれる記事はありません。寛延 2 年（1749）の藩への報告では「一、經堂 三間半四面」とあり、この時期までに經堂が建設されていたのがわかります。この建物は三間半四面とあり、建物の一辺の実測値が三間半であったということです。現存する建物の実測値 6,960mm～6,950mm は 6 尺 5 寸（1,970mm）で 3 間半に相当し、この建物と一致します。

また、建立年代は古文書から寛保 3 年（1743）の建立とされていますが、これは建築様式から推定した年代とも一致します。

輪藏内部については、明治 15 年（1882）の記録に「一切經藏」とあり、黄檗版一切經が収蔵されていました。

久留米市内で輪藏をもつ經藏は、現存するものでは田主丸町菅原の伯東寺、同町田主丸の来光寺が知られ、伯東寺の經藏は善導寺同様、県指定を受けています。

善導寺の經藏は、江戸中期から後期にかけて建設された本堂・大庫裏などとともに伽藍を構成する建築物であり、その規模、古さなどから貴重な建築遺構として高く評価されるべきものです。



付図 4

